

教会成長研究院

【第三弾】 神山威氏の講演内容の誤り、およびみ言解釈の誤り

およびみ言解釈の誤り (前編)

神山威氏は、二〇一四年六月十八日、韓国・釜山で開催されたUCI(別名・郭グループ)での集会において講演をし、その後も韓国各地での講演会で、天一国経典『天聖經』の批判、真のお母様に対する批判、および後継者問題などについて自説を語り、統一教会員の一体化を損ねる分裂行動をしました。神山氏はそれにとどまらず、日本でも同年九月二十一日に東京、同二十三日に名古屋、同二十六日に福岡で講演会を行い、同様の批判を繰り返し述べ、教会内部に混乱を引き起こさせる分裂行動を取っています。

既に【第一弾】【第二弾】「神山威氏の講演内容の誤りについて」を掲載しましたが、今回は、神山氏に同調するブログに掲載された言説などに基づき、その問題点を指摘します。なお、誌面の都合上、文字数の制限があるために、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト(https://trueparents.jp)」をご覧ください。(教会成長研究院)

注・本文中、神山氏側の主張は「茶色」で、真の父母様のみ言や既に発表した公式見解は「青色」で色分けしています。

(1) 天一国経典の編纂は、み言の改竄ではありません

神山氏は、真のお母様が天一国経典を編纂されたことに対し、

「今なお「お父様が遺言として残したみ言を変えてしまう? それは無いでしょう。……『平和神経』が『平和神経』に、お父様が愛された黒表紙の『天聖經』が赤表紙の『天聖經』に、そし

つてに変更します。そのように変更することで、徳野会長が、

八大教材教本『天聖經』と天一国経典『天聖經』を区別せず、八大教材教本『天聖經』を天一国経典『天聖經』に改竄しているかのように印象つけようとしています。これは悪意ある批判です。

ところで、八大教材・教本『天聖經』には二〇〇〇年以降の真のお父様のみ言がほとんど収録されています。特に、お父様は二〇一一年天曆一月一日(陽曆二月三日)の「第四十四回真の神の日と神様王権即位式十周年記念および真の父母様(聖誕)の記念式典で、「先生が生涯全体の結実として宣布したみ言、それが『天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会』です」と語られました。しかし、このみ言は八大教材・教本『天聖經』や『平和神経』に含まれていませんでした。天一国経典にこのみ言が収録されたことは、

未来永劫にみ言を残していくた

めなのです。

もし、天一国経典の内容が、真のお父様が語っておられない内容であれば、それは改竄に当たります。しかし、それらはお父様のみ言そのものです。それを批判することは、それを語られたお父様を批判することであり、真のお母様に対するとんでもない誹謗中傷です。

ちなみに、「第一弾」の公式見解のなかで、「真のお父様が聖和された後、真のお母様は直ちにみ言を整理していかれましたが、それは『八大教材・教本』以外のみ言を、分派が恣意的に『み言集』として作成して公表し、み言によって分裂と混乱を引き起こす危険性のあることを、いち早く見抜かれ、それを未然に防ぐためなのです」と述べたことに対し、神山氏に同調する人物は、「(その指示は)聖和後ではなく『天聖經再編の委員会を持つ』と発表したのは二〇一二年八月二十三日で文師が集中

て父母経に話になりません」としつつ批判します。何度も述べていますが、お母様は八大教材・教本『天聖經』を改竄しておられません。

八大教材・教本『天聖經』と天一国経典『天聖經』は明確に区別されており、『平和神経』と『平和神経』もその名が示すとおり、明確に区別されています。

真のお母様が編纂された天一国経典は、八大教材・教本『天聖經』と同様に、真のお父様のみ言(『文鮮明先生御言選集』)を主題別に編纂したもので、み言そのものです。

ところが、神山氏は、徳野英治会長が天一国経典『天聖經』を「天聖經増補版」と表現したことをもって、「あなたはお父様の『天聖經』が、『永遠の経典』と信じないのですか?」(神山氏「公開質問状3」と八大教材・教本『天聖經』を蔑ろにしているかのように批判します。徳野会長は、「八大教材教

治療室に入るようなときで決して聖和後ではありません」と批判します。

しかし、この批判は誤りです。真のお母様が、真のお父様のご入院中に編纂を指示され、金榮輝先生を委員長として任命し、二〇一二年八月二十三日「編纂委員会」を發足されたのは、あくまでも『真の父母経』の編纂についてのみでした。

天一国経典『天聖經』の編纂は、真のお父様が聖和された後、八大教材・教本『天聖經』に二〇〇〇年以降のみ言がほとんど含まれていないため、二〇〇〇年以降のみ言を補完して整理しなければならぬ「課題」を解決しなければならぬこと、およびお父様が全生涯にわたって語られた『平和神経』に入っていない「講演文」を整理し、未来永劫に残すことを意図され、天一国経典『天聖經』『平和神経』の編纂を指示されたのです。

本『天聖經』は重要です。と

ろが、八大教材教本『天聖經』には、二〇〇〇年以降のみ言が掲載されていないのです。これらの欠落しているみ言を整理して、より完璧なものを作りたいという動機で、天一国経典『天聖經』が編纂されたのです。真のお父様のみ言を大切にすることが、お父様が誰よりも強いのは、ほかならぬ真のお母様です」(『トウデイズ・ワールドジャパン』二〇一四年十二月十日号、一六ページ)と述べており、八大教材教本『天聖經』と天一国経典『天聖經』を明確に区別し、「八大教材教本『天聖經』は重要です」と述べています。

神山氏は、徳野会長の言葉を正確に引用せず、「八大教材教本は重要です(が)、2000年以降のみ言が掲載されていない(ので)、より完璧なものを作りたいという動機で、天一国経典『天聖經』が編纂された」(神山氏「公開質問状3」とか

(2) 「独り娘」は、真のお父様が語られたみ言です

神山氏は、「お母様はお父様のみ言にない『独り娘』のような独自の理論を語られはじめています。こういった言動を見て、私は『絶対的に一体』であるべきお父様がそつなっていない事に、『これは摂理歴史的に、将来大変な禍根を残す』と深く憂慮する」(神山氏「公開質問状2」、「同1」)でも触れている)と述べ、真のお母様を批判します。

しかし、「独り娘」は、真のお父様が語っておられるみ言です。

「神様の前において、『私は独り子だ』とイエス様が言われたのです。独り子が出てきたのに、独り子が一人で暮らしたなら大変です。独り娘がいなければなりません。それで、独り娘を探して、神様を中心として、独り

子と**独り娘**が互いに好む場で結婚しなければならぬのです。それで、**神様が縦的な父母として喜び、その神様の独り子と独り娘が横的な父母として喜び得る**新郎新婦になって、地上で息子、娘を生まなければなりません。そうしてこそ初めて、一族が広がり始めるのです。それゆえ、イエス様においてイスラエルの国に背いても、ユダヤ教に背いても一番必要としたものがありました。それは何だったのでしょうか。正に女性です。男性の前に女性がいないてはなりません」（八大教材・教本『天聖經』一七六〜一七七ページ）

このみ言は、『ファミリー』一九九八年四月号の一九から二〇ページにも掲載されています。「エデンの園の**アダム**は、**神様の独り子**です。エバは、**神様の独り娘**です。彼らが成長し、

**独り娘**に出会うために、**イエス様**は再臨するのです。再臨主が来て**小羊の婚宴**、すなわち**婚宴**をしなければなりません。……その位置が、**墮落していないアダムとエバの位置です**」（四一〜四二）

真のお父様は、第三**アダム**である再臨主を「**独り子**」と述べ、そのかたと結婚すべき**第二エバ（真の母）**を「**独り娘**」と表現しておられます。その結婚式が「**小羊の婚宴**」です。ところで、真のお父様は一九六〇年に真のお母様と第一回目の「**聖婚式**」をされましたが、その結婚を次のように語っておられます。

「一九六〇年が、いつたなどの基準であったか？ 墮落した**アダム**、**エバ**の立場、**長成期**完成級の基準である。……完成基準を残して祝福した基準が、一九六〇年である」（『祝福家庭と

春の日になって……明るく咲いた花が香りを漂わせるようになれば、**神様が結んでくださった**でしょう。神様が結婚式をしてあげて成し遂げようとしていた**創造の最高理想**が、**アダムとエバ**を中心として成し遂げられるのです。彼らが**独り子と独り娘**としてよく育ち、**思春期**まで行こうとすれば、**期間**が必要なのです」（一五九〜一九五）  
明先生御言選集 一五九巻一九五ページ  
ジの意。以下、同じ）

真のお父様は、墮落していない**アダム**と**エバ**は、**神様の独り子**と**独り娘**であると語っておられます。

「**イエス様**は、『私は**神様の独り子**だ』と言いました。独り子に必要なのは**独り娘**です。**イエス様**がこの地上で世界を救うために出発しようとすれば、一人ではできません。……独り子だと主張した**イエス様**の目的は、

理想天国（Ⅱ）二八〜二九ページ）

人間始祖**アダム**と**エバ**は**長成期**完成級で墮落しましたが、真のお母様は一九六〇年の**聖婚式**によって、**長成期**完成級の基準から**完成圏**に上がる「**七年路程**」を通過されました。一九六〇年から六八年一月一日まで歩まれた**第一次七年路程**は、人間始祖が墮落したため歩みえず残された**前人未踏**の**成長期間**を通過された**路程**です。この期間には、墮落以前の立場を復したのちに通過する**路程**であり、ゆえに真のお母様には**原罪**がありません。原罪がないならば、その女性（**エバ**）は**神様の血統**を持っており、その女性のことを**神様の「独り娘」**と言つのです。

「だれであっても、**母親**の子宮にくっついて**母親の血肉**を吸い取って大きくなったでしょう。……**母親の血肉**が必要であり、

世界を統一して号令することでそれをする前に家庭をつくらなければならぬのです。……もし、**イエス様**が、**神様の独り子**として**独り娘**に出会って結婚式をするとなれば、その**結婚式の主**は、間違いなく**神様がしてくださる**のです。救済**理**の**最高**の目的は、**神様が愛する一つの家庭**をつくることです。……その場を失ってしまったので、再び取り戻さなければなりません」（一五九〜一九二）

真のお父様は、第二**アダム**である**イエス様**を「**独り子**」、**イエス様**と結婚すべき**第二エバ（真の母）**を「**独り娘**」と語っておられます。

「人類が生まれて以降、四〇〇〇年目にこの天地間に**神様の独り子**が生まれました。良い知らせです。……それで、**キリスト**が福音という言葉が出てくるようになったのです。福音と

母親の**骨肉**が必要であり、母親の**愛**が必要であり、**生命**が必要なのです。……**母親の愛**のゆえに、**母親の血統**のゆえに、**私**が生まれたという事は否定できません。……女性は何のために生まれたのですか？ 男性のためにです。一時代ですか、**永遠の時代**ですか？ **永遠の時代**です。**神様の娘の愛**は、**絶対**、**唯一**、**不変**、**永遠の愛**であるので、その**愛**を中心として、その**対象**の**価値**は**絶対**の**価値**であり、**絶対**の**価値**であるということを知らなければなりません。……それゆえに、**（神様の娘の）女性**の前に**男性**は、**絶対**の**真理**の**愛**の**相対**なのです」（『ファミリー』一九九九年一月号、三〇ページ）

真のお父様は、「**生命**を見ましたか？ **生命**に触ってみましたか？ **生命**は見えるけど、**生命**は分かりません。触ってみることはできません。血統もそ

は、**幸福**な**音信**です。その時まで**神様の独り子**が現れることができません、**人類**が**神様**を中心とする**愛**の**関係**を**結ぶ**ことができなかったために、**人類**にはそれが**恨**でした。……**神様**は、先に**独り子**を送られました。……その次には、**独り娘**が現れなければなりません」（三三〜三四）

真のお父様は、**イエス様**を「四〇〇〇年目に……**独り子**が生まれました」と語っておられます。では、再臨主が**アダム**以来六千年目に現れた**独り子**であるならば、その再臨主の前に現れる**独り娘**に対しては、どう表現されるべきでしょうか？

「**イエス**・**キリスト**は、『私は**神様の独り子**だ。神様は私の父だ』と言いました。……**神様の独り子**はいたのですが、**独り娘**がいません。**独り娘**に出会うことができなかったのです。神様の**初愛**をすべて受けることができ

うです。血統は夫婦が愛するその**密室**、**奥の部屋**で結ばれるのです。そして、**精子**と**卵子**が出合って**生命**体として**結合**するとき、**血統**が**連結**されるのです」（『ファミリー』一九九五年三月号、二二ページ）と語っておられ、**血統**の**連結**には、**当然**のことながら、**男性（精子）**だけでなく、そこに**女性（卵子）**も関与していることについて、**明確**に言及しておられます。

前述したみ言で、真のお父様が「**エデンの園**の**アダム**は、**神様の独り子**です。**エバ**は、**神様の独り娘**です」と語っておられるように、**本来**の**エバ（女性）**は**神様の「独り娘」**であり、**神様の血統**を持っているということを知らなければなりません。

神山氏の批判は、真のお父様のみ言を踏まえていないために起こったものです。